

様 式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19（共通）

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書



令和 4 年 6 月 27 日現在

機関番号：33921

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2021

課題番号：18K12415

研究課題名（和文）名詞句からの部分的抜き出しに関する共時的・通時的変異

研究課題名（英文）Synchronic and Diachronic Variations on Subextraction out of Noun Phrases

研究代表者

小池 晃次（Koike, Koji）

愛知淑徳大学・教育部門・センター・講師

研究者番号：50804431

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 700,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は英語を含めた諸言語における名詞句からの部分的抜き出しの可能性を調査した。このテーマは英語学の枠組みにおいて長年の課題であったが、本研究は循環的線形化というこれまで探究されてこなかった観点から先行研究より妥当な分析を与えることに成功した。また、昔の英語における抜き出し可能性も調査し、今と違って昔の英語では外項としての主語からも部分的抜き出しが可能であったという事実を新たに発見した。これらの理論的提案と経験的発見の詳細は日本英語学会が発行するEnglish Linguistics第35巻2号における論文において公表されている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

名詞句からの部分的抜き出し現象に対してはこれまで英語学の枠組みで統語論、意味論、音韻論という3つの異なる視点から様々な分析が提示されてきた。本研究は先行研究の成果を詳しく再検討しながら線形化という統語と音韻の接合部の観点から新たな説明を試みた。この点で本研究は当該分野の研究史の手短なまとめと今後の研究を推し進める叩き台としての両方の学術的意義を持つ。また、英語をイタリア語と比較検討することで言語間の共通点や相違点が明らかになり、これによって英語に限らず人間の言語能力全般の解明にも一定の貢献を果たすことができた。

研究成果の概要（英文）：This study investigates the (im)possibility of subextraction out of noun phrases in several languages including English, a long-standing problem within the framework of English linguistics. This study has succeeded in providing more plausible analysis than previous studies in terms of cyclic linearization, an approach which has not hitherto been explored in the context of subextraction. In addition, it has succeeded in presenting the new data that Early English allowed subextraction out of external subjects, unlike Present-day English. The details of these theoretical proposals and empirical findings are shown in my paper on English linguistics No. 2 of Vol. 35 published by the English Linguistics Society of Japan.

研究分野：英語学

キーワード：共時的・通時的変異 名詞句からの部分的抜き出し 英語 イタリア語 生成文法 wh移動 外置 循環的線形化

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

#### 1. 研究開始当初の背景

(1) 現代英語において内項からの部分的抜き出しは可能であるのに対し、外項からの部分的抜き出しは不可能であることが Chomsky (2008)等の先行研究によって観察されてきた。他方で、現代イタリア語では内項だけでなく外項からも部分的抜き出しが許される。したがって、この共時的変異には満足はいく説明が与えられなければならない。このように、当該分野における共時的先行研究の問題点として、経験的観察は成されているが、それらの共時的差異に対して満足はいく理論的説明が未だに与えられていなかった。

(2) 英語を含め、ある言語の部分的抜き出しの歴史の変遷を調査した先行研究は皆無であった。そこで、英語史に注目して史的電子コーパスを用いた試験的調査を行なうと、初期英語において内項は勿論のこと外項からでも部分的抜き出しが適用されている実例を一定数発見できた。したがって、この通時的変異にも妥当な分析が与えられなければならない。このように、当該分野における通時的先行研究の問題点として、詳細な量的データすら提示されておらず、上記の通時的差異がどのようにして説明されるのか不明であった。

#### 2. 研究の目的

(1) 各言語における名詞句からの部分的抜き出しの(不)可能性を決定するメカニズムを生成文法という英語学の観点から解明することを当座の目的として設定した。また、昔の英語も研究対象とし、初期英語と現代英語を比較検討しながら、外項からの部分的抜き出しが可能から不可能になった史的变化にも満足はいく説明を与えることを目標に据えた。

(2) 名詞句からの部分的抜き出しを一例として、人間言語における本質的な言語特性と表面的な言語特性を識別することを最終的な目的とした。同じ時代において言語間に跨って観察される特性は人間言語に深く根差した本質的特性である一方で、言語間で差異が見られる特性は各言語に選択の余地が残された表面的特性であると結論付けられる。同様に、通時的観点に立つと、同じ言語において時代を経ても変化しない特性は本質的特性だと見なすことができるのに対して、時代を経て変化してきた特性は表面的特性だと見なすことができる。この予測の下で本研究の理論的提案や経験的観察の妥当性を共時的・通時的観点から検証することを計画した。

#### 3. 研究の方法

理論的・経験的両側面において現行の英語学の枠組みで利用可能な道具立てを使って部分的抜き出し現象を研究調査した。

(1) 理論的側面について述べると、現代英語と現代イタリア語を主として取り上げ、まず Haegeman et. al (2010)などの先行研究による分析の問題点を指摘するところから始めた。それらの理論的問題点を克服するために、具体策として Fox and Pesetsky (2005)の循環的線形化と Gallego (2010)のフェイズ拡張という2つの考えを基盤としながら全く新しい分析を提案した。この分析の下では、外項から部分的に抜き出すと、現代英語では  $v^*P$  フェイズの線形化が順序矛盾を引き起こすのに対して、現代ポーランド語や現代スペイン語では  $v^*-to-T$  移動によって TP へフェイズが拡張された結果、そのような順序矛盾は生じないと上記の1で問題提起した言語事実を正しく説明できる。

(2) 経験的側面について述べると、現代英語や現代イタリア語など現存する言語に関する経験的データは Gallego (2010)等の文献を読むことで理解することができた。他方で、1で上述したように、初期英語における部分的抜き出し可能性に言及した論文は皆無であったので、YCOE や PPCME という史的電子コーパスを用いた。もっと明確に述べると、英語史の各時期における名詞句からの部分的抜き出しの生起頻度を割り出すことを試みた。それから、初期近代英語期まで  $v^*-to-T$  移動が生産的だったという Vikner (1997)の考えに基づき、現代イタリア語に対して提案した上記の分析が初期英語にも当てはまることを論証した。

#### 4. 研究成果

(1) 先行研究におけるような規定的な条件を仮定せず、部分的抜き出しに関する多くの事実に説明を与えることができた。例えば、Chomsky (2008)では末端条件という部分的抜き出しを説明するためだけの条件を仮定しているが、本研究はそのような規定を設けずに、なおかつ英語だけでなく他言語における部分的抜き出しの事実までも循環的線形化を使って説明できた。重要なことに、循環的線形化は元々 Fox and Pesetsky によって連続循環的  $wh$  移動や目的語転移に対して提案されており、部分的抜き出しからは独立した現象によってその正当性が既に立証されている。

(2) 現行の理論で本研究によってのみ捉えられる経験的事実があった。Lasnik and Park (2003)

が指摘するように、現代英語では間接疑問文縮約という省略が適用されると、外項からの部分的抜き出しが文法的になることを知られている。本分析では、部分的抜き出しの可否を音韻部門における線形化に帰するので、順序矛盾を引き起こしていた部分の音声内容が削除されれば文法的になるという事実を容易に捉えることができた。

(3) 最新の理論的概念を用いながらも、独自の新しい分析を提案することができた。フェイズという概念は現在最も活発に議論されているトピックの1つであり、このフェイズに基づく派生モデルを取り入れることによって現行の理論と互換性のある分析を提案した。他方で、その分析の切り口を線形化に求めるという点において、本研究は統語的あるいは意味的な切り口の先行研究とは全く異なる。

(4) 初期英語における部分的抜き出しについて、初めて詳細なデータを提示する。部分的抜き出しに関する通時的先行研究は皆無であるため、本研究は当該分野において初めて初期英語における部分的抜き出しの実例を提示することに成功した。しかしながら、研究当初の予想に反して、量的に十分な量の事例を発見することまではできなかった。そこで、調査の方針を量的なデータの収集から質的なデータの収集に切り替えた。その結果、同時代の1つのテキストだけでなく複数のテキストにおいて事例が発見されたので、初期英語において外項から部分的抜き出しが確かに可能性であったと論じた。

(5) 当該の分野だけでなく、関連する他の分野にも波及効果があった。本研究は線形化にスポットライトを当てるので、部分的抜き出しの(不)可能性は統語部門で決定されるという伝統的な考えに疑問を呈する結果になった。また、本研究はイタリア語と同様に  $v^*$ -to-T 移動を持つスペイン語などの他の現代言語にも当てはまることが分かった。一方で、フランス語は  $v^*$ -to-T 移動を持ちながらも外項からの部分的抜き出しを許さないのも本研究が提案する分析にとっての反例という点で興味深い言語であることも判明した。

#### < 引用文献 >

Chomsky, Noam (2008) "On Phases," *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essays in Honor of Jean-Roger Vergnaud*, ed. by Robert Freidin, Carlos P. Otero and Maria L. Zubizarreta, 133-166, MIT Press, Cambridge, MA.

Den Dikken, Marcel (2007) "Phase Extension: Contours of a Theory of the Role of Head Movement in Phrasal Extraction," *Theoretical Linguistics* 33, 1-41.

Fox, Danny and David Pesetsky (2005) "Cyclic Linearization of Syntactic Structure," *Theoretical Linguistics* 31, 1-45.

Gallego, Ángel J. (2010) *Phase Theory*, John Benjamins, Amsterdam.

Haegeman, Liliane, Ángel L. Jiménez-Fernández and Andrew Radford (2014) "Deconstructing the Subject Condition in Terms of Cumulative Constraint Violation," *The Linguistic Review* 31, 73-150.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Koike Koji	4. 巻 36
2. 論文標題 Negation in Early English: Grammatical and Functional Change	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 English Linguistics	6. 最初と最後の頁 305-315
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Koike Koji	4. 巻 35
2. 論文標題 Subextraction from NP and Cyclic Linearization	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 English Linguistics	6. 最初と最後の頁 297-315
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小池晃次	4. 巻 39
2. 論文標題 SAI再考：ラベル付けの観点から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 JELS	6. 最初と最後の頁 30-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 小池晃次	
2. 発表標題 SAI再考：ラベル付けの観点から	
3. 学会等名 日本英語学会	
4. 発表年 2021年	

〔図書〕 計1件

1．著者名 田中智之、茨木正志郎、松元洋介、杉浦克哉、玉田貴裕、近藤亮一編、小池晃次 他著	4．発行年 2022年
2．出版社 開拓社	5．総ページ数 426（執筆担当部分：p.162-171）
3．書名 言語の本質を共時的・通時的に探る	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------